

て気がついた時には、母子は何時か、薄暗い背戸の戸袋に犇としがみついたまゝ、恐ろしい顔を同じやうに睨み合せてゐた。

○ 「藪の家」の勝あんが失踪したと聞いて、村の人達はみんなふ、んと笑つた、村中で勝あんを少し足りない男だと思つてゐたから。藪の家は、勝あんが居なくなつてから、却つて身上が殖えた様子で、間もなく、垢ぬけた勝あんの女房には、小器用さうな亭主が出来た。

幾年が経つて村で勝あんの噂すら忘れはてた頃の或る夕暮、藪の家の戸口に、汚ない風呂敷包を一つ下げた乞食みたいな男が来て立つた。それは「余りに遅く帰つた主人」だつた。醜く片眼の膨れあがつた勝あんは、親身の人々に乞食よりも冷たく遇はれたに違ひなかつた。

やがて勝あんは、自分の家の畑の隅にある農具小舎に起臥する別居の身となつて、その日から「独り勝あん」の、生活が始まつた。自給自足、勝あんは日毎暗い中から暗くなるまで、黙々と独り働いた。村人は一層勝あんを白痴扱ひにした。お寺の枇杷を掠め奪る鼻たれ小僧まで、勝あんに齡するを潔しとしなかつた。

村人の処置はどうあれ、土砂の車を曳いても、勝あんの礼節は正しかつた。

十年ばかりたつて、独り勝あんは、啞のように黙つて死んで行つた。村人は大勢寄つて、芥子畑の中の勝あんの庵の後始末に働いた。小舎の中が臭くて堪えられないといつて、手伝ひの

人々は代り／＼外の明るみへ出て来た。小舎の前の芥子畑の赤い花の上を、煙草の煙が絶えず浮いては消えた。小舎が跡方もなく取片附けられる段になると、勝あんの死床の下の地中から、小さな壺が一つ由ありげに首を出してゐた。古のソロモンの壺よりも村人に好奇の眼を見張らせた古壺の中からは、やがて、悪魔の代りに、ほんとうの銭金が夥しく出た、中にはすでに通用品を失つてしまつた古紙幣も交つて。

○ 独り勝あんの墓は、金持のそののやうに立派なものが建つた。そして墓石に刻んだ戒名にも、「独」といふ一字が入つてゐた。

護送の途中、鉄道線路の踏切で、巡査の捕縄を切つて逃げだした泥棒が、村へ入込んだといふので、村中は騒ぎになつた。縄を切られた駐在所の巡査は殊更夢中になつてゐた。

月影の田甫路を泥棒がとつと逃げる。巡査が重たい佩剣の鑰を握つて飛出す。それに、酒に酔ばらつた殺生人の伝三が、どう腹を立て違へたものか、肌脱ぎになつて巡査を追駆廻して歩いた。これが宵の口。

夜がぐつと更けてから、一旦静まりかけた村の内が、また何となく物々しくなつた。

村には一棟しかない四軒長屋の、籠屋の背戸の盥の下から真白い物が飛出して、一軒置いて隣りの小間物屋の外廁に飛込んだ。と、廁からは巡査と泥棒が揉合つて転げ出た。

かうして、人騒がせな泥棒は再び巡査の手に返つたが、「先刻開けて見た時には、確かに居なかつた。」といつた弁解が怪しい